

高校教育・大学教育にかかる論点について

高崎経済大学教授 八木秀次

○グローバル化に対応できる人材とは、一部の専門知識を持った存在ではなく、英語等の外国語能力を含むコミュニケーション能力、及び幅広い国際的な教養と日本人としてのアイデンティティを備えた人材である。

○我が国の大学教育も高校教育もそれに対応したものになっていない。

○我が国の大学は、帝国大学の創設以来、専門教育を行ってきた。学部は専門分野を教授する場である。

○また、大学は、すべて研究機関であり、教員は専門分野の研究者である。

○大学進学率の低い時代はそれでもよかった。一部の専門知識に秀でた人たちがその専門知識で国家・社会をリードする形である。

○しかし、大学進学率が上がり、大衆教育化し、また、グローバル化するにつれて、専門教育の限界が露呈することになっている。

○大学は多様である。理工系など専門知識を教授する機関、医師や法曹など高度の職業人を養成する機関、資格や技術を必要とするその他の職業人の養成機関は、その機能を充実させることはもちろんである。

○しかし、その他の分野については、一部、世界的な専門研究を行う大学での専門的な学部教育は残し、その機能を充実させつつも、多くの大学の学部教育は、先に述べたグローバル化に対応した教育に転換させるべきではないか。

○また、専門知識を教授し、職業人を養成する大学においても、コミュニケーション能力と日本人としてのアイデンティティを育てる教育は不可欠であり、その充実を図るべきである。

○とりわけ、日本人としてのアイデンティティを育てる教育は、これまでの大学教育では最も重きを置かれなかったものであり、講座の必置を求めるなど充実させる必要がある。

○義務教育や高校段階で育んだ「我が国と郷土を愛する態度」をいっそう確かなものにし、大学教育で育成される高い個人的な能力を、我が国と郷土のために使おうとする意志へと結びつける必要がある。

○大学が大衆教育となった今日でも、大学教員は自らを教育者というよりは研究者と考えている。

○しかし、大学は文字通りの高等教育を行う教育機関に転換し、教員も自らを教育者として認識する意識改革が必要である。

○自らの狭い専門領域にとどまることなく、教員自らがグローバル化に対応できる人材となることが求められる。

○大学院は専門研究・教育を行う機関として「選択と集中」を行うなどして質的充実を行う必要がある。